横断的・総合的な幼稚園教育教員養成プログラムの構築研究

研究代表者　木村　博一（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
研究分担者　伊藤　圭子（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
植田　敦三（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
木原成一郎（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
権藤　敦子（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
難波　博孝（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
松本　仁志（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
山崎　敬人（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
池田　吏志（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
岩坂　泰子（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
寺内　大輔（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
永田　忠道（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
松宮奈賀子（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
渡邉　　巧（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
井上　　弥（学習開発学講座）
栗原　慎二（学習開発学講座）
児玉真樹子（学習開発学講座）
樋口　　聡（学習開発学講座）
山内　規嗣（学習開発学講座）
深谷　達史（学習開発学講座）
藤木　大介（学習開発学講座）
米沢　　崇（学習開発学講座）
研究協力者　新井　　馨（教育学習科学専攻）
長山　　弘（教育学習科学専攻）

Ⅰ　研究の背景と目的

2017 年３月，文部科学省から『幼稚園教育要領』が，厚生労働省から『保育所保育指針』が，そして内閣府・文部科学省・厚生労働省から『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が告示された。また，同年（2017 年）には教員免許法・同施行規則の改正に伴い，施行規則上の科目区分の大括り化が図られた。幼稚園免許取得のための科目では，現行の「教科に関する科目」と「保育内容の指導法」が，「領域及び保育内容の指導法に関する科目」の区分に統合された。また，「保育内容の指導法」には，「（情報機器及び教材の活用を含む）」の文言が追記され，「教科に関する科目」は「領域に関する専門的事項」（以後「領域」と記す）に名称変更された。この改正に伴い，養成校には，現在の「教科に関する科目」から「領域」への移行が求められた。移行期間の措置として，『改正施行規則附則第７項』では，平成 31 年度～34 年度までは，「領域」に該当する教科として，国語，算数，生活，音楽，図画工作，体育が設定され，これらの教科の，「教科に関する専門的

事項」の授業科目が「領域」に該当する授業科目として位置づけられたが，平成35年度からの完全実施に向け，幼稚園に特化した内容である「領域」の授業科目の開設が求められている。そこで，本研究では，『幼稚園教育要領』の分析を踏まえた領域科目の構想（研究１），幼稚園教育実習アンケートの分析（研究２），学術研究の動向調査（研究３）を実施し，異なる専門性を有する教員が共同的に研究を行うことにより，横断的・総合的な幼稚園教育教員養成プログラムの構築を目指した。

（木村博一*・山内規嗣*）

Ⅱ　『幼稚園教育要領』の分析と領域科目の構想（研究１）

１. 目的と方法

研究１では，『幼稚園教育要領解説』における各領域（五領域）の記載内容を分析し，隣接する専門分野の知見を踏まえた各領域の科目内容と方法について構想することを目的とした。分析対象は，2018年３月発行の『幼稚園教育要領解説』第２章２節「各領域に関する事項」の「健康」（pp.145-166），「人間関係」（pp.167-192），「環境」（pp.193-212），「言葉」（pp.213-232），「表現」（pp. 233-247）とした。各項には，ねらいの原文と［内容］，そして［内容の取扱い］の解説が記されている。各項目の解説の文章構成は二つに分けることができ，一つは子ども観，もう一つは指導観である。記述は最初に記載内容に関連する子ども観が，主に「幼児は」を主語として述べられ，その後，教師の指導上の留意点が記載されている。項目によっては留意点の記述の後に指導により期待される子ども像が示されることもある。このことを踏まえ，本研究では次のように分析を行った。

①各領域における指導観の記述を抜粋し，指導の観点を抽出した。②①の内容と各著者の専門分野の知見を踏まえ，養成課程における各領域科目の構想に向けた留意点をまとめた。

２．結果

「健康」領域における指導の観点は，［教師の関わり］，［環境設定］，［注意事項］，［家庭との連携］としてまとめられた。健康における指導では，「健康な心と体」を教師が主導して養わせるのではなく，幼児が自らの興味・関心に基づき行動しようとする自発性を重んじることが重要である。その際には，幼稚園に在籍する３歳児，４歳児，５歳児では心身の発達に大きな差があることに留意した指導が不可欠である。例えば，年齢を重ねるごとに幼児の運動機能は発達し，出来ることが多くなる。一方で，安全面に関しては「危険なことは具体的に知らせる」というように，「指示・注意」により，何が，なぜいけないかを考えさせる指導が記されていた。さらに，［家庭との連携］における「生活実態をとらえる」「情報」などの用語にみられるように，幼児は幼稚園での生活と家庭での生活の連続性の中で過ごしているという観点を持ち，教師と保護者が幼児に関する情報を交換し合いながら，共に幼児の健康な心身を育てていくことが必要である。

「人間関係」領域における指導の観点は，［教師の関わり］，［環境設定］，［注意事項］としてまとめられた。人間関係における指導では，「幼児が試行錯誤をしながら考えを巡らせている時間を十分認めること」によって，「自分のやりたいこと」を持てるようにする必要性が示されている。また，「行事などでは，結果やできばえを重視し過ぎたり

することのないよう」にと記述がある。そのため，子どもの遊びそのものを大切にし，遊びの中で，人との関わり方を掴ませ，自己有用感を高めながら，社会性や道徳性の芽生えを培っていくことが求められている。なお，「生命や人権に関わること」は，「悪いと明確に示す」ことが示されている。また，人間関係の指導においては，教師と幼児の信頼関係（アタッチメント）や教師の幼児への関わり方が大切であることが，その記述量の多さからも窺える。

「環境」領域における指導の観点は，［教師の関わり］，［環境設定］，［注意事項］としてまとめられた。環境における指導では，必ずしも，変化の様子を完全に理解したり，言葉に表したりするということではなく，幼児なりに規則性を見いだそうとする態度を育てることが大切であるといった特定の方法に幼児を当てはめる指導に対する注意が記されていた。幼児が自らの生活環境に対して，驚きと喜びを感じることを第一にして，幼児なりの法則性を見いだそうとする態度を育てることが大切であり，学問的や学術的に正確な理解や表現，法則性をつかませることは，この幼児期の段階では求められていないことの明示がなされていた。そのため，教師自身も環境に対する愛着をもち，大切に取り扱っている姿を幼児に示し，幼児が環境の中で豊かな体験が積み重ねながら，遊びを通して探究心や公共心の芽生えを培っていくことが求められている。

「言葉」領域における指導の観点は，［教師の関わり］，［環境設定］，［注意事項］，［教師の資質］としてまとめられた。［環境設定］で挙げたように，言葉が人との関わりを通して獲得されるものであることを考えれば，言葉における指導の基盤は「教師や友達との温かな人間関係」や「安心して言葉を交わせる雰囲気」などである。教師や友達との間に安心感や信頼関係があれば，幼児は伝えたい思いを身振りや言葉で伝えることが容易になる。また，幼児の伝えたい思いは体験・経験を通して得られるものであることを考えれば，幼稚園生活や日常生活で「体験を積み重ねる」ことも言葉における指導の基盤である。教師は，［注意事項］で挙げたように「単に言葉を覚えさせるのではなく」，互いの信頼関係のもとで，幼児の体験に裏打ちされた生きた言葉の学びになるように指導を工夫する必要がある。幼児は，思いを伝え相手の共感や理解を得られれば，思いを表現することの喜びや楽しさを感じるようになる。そのような受容体験を繰り返しながら言葉に対する感覚を豊かにしていく指導が求められる。

「表現」領域における指導の観点は，［教師の関わり］，［環境設定］，［表現活動への留意点］，［材料・用具］，［注意事項］，［教師の資質］，としてまとめられた。表現における指導では，教師のイメージを押しつけない，専門分野の枠にこだわらない，偏った技術習得のための指導をしないといった特定の方法に幼児を当てはめる指導に対する注意が記されていた。あくまでも，幼児自身が表現手段を獲得したり表現方法を発見したり，自ら工夫して表現できたりする力の育成が求められていた。このことは，一斉授業で何か一つの技法を習得させるというよりも，幼児自らが主体的に活動し，興味関心や他者からの刺激を受けながら知識や技能を習得できる指導といえる。そのために，教師は様々な表現が楽しめる材料・用具，イメージや表現意欲を喚起できる環境設定の知識・技能，そして，教師自身も児童の視点に立って感動を共有できたり，多様な考えを受容できたり，またそれを他の幼児にも広げられる資質・能力を有することが求められている。

上記の分析を踏まえ，各領域科目の授業における留意点をまとめたのが表１である。

表１　幼稚園教諭として必要な資質・能力

領域	幼稚園教諭として必要な資質・能力
健康	明るく伸び伸びと行動し，自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせようとする態度。／自分の体を十分に動かし，進んで運動しようとする態度。／様々な活動に親しみ，楽しんで取り組む態度。／いろいろな遊びの中で十分に体を動かすために必要な知識・技能及び態度／身の回りを清潔にし，衣服の着脱，食事，排泄などの生活に必要な活動に関する知識・技能及び態度。／健康な生活リズムに関する知識・技能及び態度。／危険な場所，危険な遊び方，災害時などの行動の仕方など安全に関する知識・技能及び態度。／自分の健康の維持増進ならびに，病気の予防などに関する知識・技能及び態度。／幼稚園における生活の仕方を知り，自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する知識・技能及び態度。
人間関係	生活や遊びの内容に関する知識・技能及び態度。／生活や遊びの場面における幼児への関わり方に関する知識・技能及び態度。／生活や遊びの場面における環境設定に関する知識・技能及び態度。／幼児の身近な人々に関する知識・技能及び態度。／幼児の発達特性に関する知識・技能及び態度。／幼児の内面を理解するための知識・技能及び態度。
環境	身近な物質や動植物などに関する知識・技能及び態度。／身近な情報や施設などに関する知識・技能及び態度。／身近な事象に関心をもち自分なりに比べたり，関連付けたりしながら考えたり，試したりして工夫して遊ぶ態度。／季節による自然や人間の生活に変化に関する知識・技能及び態度。／日常生活の中での数量や図形などに関する知識・技能及び態度。／日常生活の中での標識や文字などに関する知識・技能及び態度。／国旗や様々な文化や伝統に親しむ態度。
言葉	言葉の働きに関する知識・技能。／言葉の発達を踏まえた話し言葉や書き言葉に関する知識・技能。／言葉の発達を踏まえた聞くこと・話すことの言語活動やコミュニケーションに関する知識・技能。／言葉遊びや児童文学に関する知識・技能。／読書や読み聞かせに関する知識・技能。／語彙や文字に関する知識・技能。
表現	活動内容や表現方法に関する知識・技能。／幼児の発達に応じた材料・用具（造形），楽器・音具・視聴覚機器等（音楽）に関する知識・技能。／幼児の造形物や表現行為を的確に見取る造形的な見方や考え方。／幼児が音や音楽で遊び，表現する行為を的確に見取る音楽的な見方や考え方。／環境設定に関する知識・技能。／表現活動時の幼児への関わりに関する知識・技能及び態度。

（伊藤圭子*・松本仁志*・池田吏志*・寺内大輔*・永田忠道*・渡邉　巧*・新井　馨*・長山　弘*・植田敦三・木原成一郎・権藤敦子・難波博孝・山崎敬人・岩坂泰子・松宮奈賀子）

Ⅲ　幼稚園教育実習アンケートの分析（研究２）

１. 目的と方法

研究２では，大学での学びを実践を通して統合する場でもある，幼稚園教育実習によって，どのような学びが生じているのかを検討し，横断的・総合的な幼稚園教育教員養成プログラムの構築に資することを目的とした。

対象者は 2017 年と 2018 年に幼稚園実習を受講した学生 38 名（2017 年 19 名，2018 年 18 名）であった。分析アンケート項目は，実習後のアンケート項目のうち，（１）保育時間（実習期間中に任されて行った保育の機会），（２）適切性（保育時間の適切性；１：少ない～３：多い），（３）満足度（実習の満足度；１：とても不満～５：とても満足）および（４）学んだこと（箇条書きの自由記述）を分析対象とした。

２．結果

保育時間は平均 4.9 時間（SD=3.01），適切性は平均 2.0（SD=0.28），満足度は平均 4.6（SD=0.75）であった。保育時間は標準偏差が 3.01 と平均に比して大きく，個人によるばらつきが大きいことがうかがえた。しかし，適切性は多くも少なくもなく，適切と評価され，また満足度は，とても満足に近い値であった。保育時間と適切性，満足度の関係を検討するため，三者間の相関係数と求めた。いずれの相関も有意ではなかったが，保育時間と適切性（$r = .13$），保育時間と満足度（$r = .16$）の間にはやや相関がみられたが，適切性と満足度（$r = -.08$）には，ほとんど相関が見られなかった。

次に，学生の学びについて，「学んだこと」に関する記述が欠落していた１名を除いた37名によって箇条書きされた内容を，箇条書きごとに抜き出した。合計139個の箇条書きを，KJ法に準拠して類似した内容に分類した。その結果， 25種類のカテゴリに分類することができた。この25カテゴリを基に，各カテゴリに関する箇条書きをしている対象者の人数と37名に対する割合を求め，多い順にカテゴリを整理して示したものが，表２である。表２からわかるように，学んだ内容として最も多くあげられているのは，「C01.環境設定」に関する学び（40.5%）で，次に多いのは「C04.目的意識・ねらいの設定」（29.7%）と「C08.接し方」（29.7%）であった。この後，「C06. 幼児の気持ちに寄り添う」（27.0%）が続き，「C02. 幼児の実態理解」（24.3%）と「C05. 幼児の主体性」（24.3%）が同率で続いている。

次に，カテゴリの類似性を検討するために，37名の25カテゴリの記述の有無を基に，カテゴリについてクラスタ分析を行った。その結果，比較的頻度の少ない「C13. 幼稚園教諭のやりがいと大変さ」，「C22. 保護者との関わり」，「C24. 活動内容」，「C10. 個と集団」，「C21. 教師間の連携」，「C16. 振り返りの大切さ」が類似性の高いまとまりとなっていた。また，「C18. 見守り」，「C20. 保育案・活動構成」，「C17. 惹きつけ方」，「C25. その他」，「C23. 子どもからの学び」類似性の高いまとまりとなっており，学んだ内容としてあげた人の偏りを反映していると考えられる。頻度の高かった「C02. 幼児の実態理解」は「C06. 幼児の気持ちに寄り添う」とまとまり，ともに幼児を理解し気持ちを大切にするという点で共通していた。「C04. 目的意識・ねらい設定」は「C05. 幼児の主体性」とまとまり，ともに幼児の主体性を活かすねらいという点で共通していた。「C08. 接し方」が「C03. 幼稚園と小学校」とまとまっているのは，小学校教諭としての接し方と幼稚園教諭としての接し方の違いを意識していることのあらわれと思われる。「C09. 伝え方と声かけの工夫」が「C11. 遊びの意義」とまとまっているのは，遊びを重視し，遊びを支援する声かけを意識していることのあらわれと思われる。学びのカテゴリの「C01. 環境設定」も，領域「環境」にあるような自然や周りの環境との関係にかかわるものではなく，環境づくりの重要性といった他の領

表２　学んだことのカテゴリ

カテゴリ	人数	割合
C01 環境設定	15	40.5
C04 目的意識・ねらい設定	11	29.7
C08 接し方	11	29.7
C06 幼児の気持ちに寄り添う	10	27.0
C02 幼児の実態理解	9	24.3
C05 幼児の主体性	9	24.3
C03 幼稚園と小学校	8	21.6
C07 一人ひとりと向き合う	7	18.9
C09 伝え方と声かけの工夫	7	18.9
C11 遊びの意義	7	18.9
C12 保護者による「遊びの援助」	5	13.5
C10 個と集団	4	10.8
C15 発達段階	4	10.8
C17 惹きつけ方	4	10.8
C20 保育案・活動構成	4	10.8
C13 幼稚園教諭のやりがいと大変さ	3	8.1
C14 保育の実態	3	8.1
C16 振り返りの大切さ	3	8.1
C18 見守り	3	8.1
C19 見取り	3	8.1
C21 教師間の連携	2	5.4
C22 保護者との関わり	2	5.4
C23 子どもからの学び	2	5.4
C24 活動内容	2	5.4
C25 その他	1	2.7

域にもかかわるものであることを踏まえれば，教育実習生の学びのカテゴリは，複数の領域にまたがる学びになっていると考えられる。

（井上　弥*・栗原慎二・児玉真樹子・樋口　聡・山内規嗣・深谷達史・藤木大介・米沢　崇）

Ⅳ　関連学会・研究会での動向調査（研究３）

動向調査では，次に示す研究会・学会に参加し，情報収集を行った。

①　日本オルフ音楽教育研究会秋例会（2018 年 12 月２日，愛知学泉短期大学）

レクチャーでは，清原みさ子氏（愛知県立大学名誉教授）による「19 世紀から 20 世紀にかけての新教育の展開と幼児教育」と題した講演が行われた。その内容は，19 世紀から 20 世紀の欧米における幼児教育と，昭和初期までの日本における幼児教育の変遷についてである。ワークショップでは，本多峰和氏（愛知学泉短期大学）による「線であそぼう！」と題した即興的な音楽づくり活動を参加者全員で行った。

②　日本乳幼児教育学会第 28 回大会（2018 年 12 月８日～９日，岡山コンベンションセンター）

シンポジウムでは，無藤隆氏（白梅学園大学），秋田喜代美氏（東京大学）による「動き始めた新要領・指針等の実質を問う」と題した幼稚園教育要領の改訂を踏まえた提言と課題の共有が図られた。武藤氏からは，10 の姿が幼稚園の保育の質向上のために設けられたことが報告された。秋田氏からは，国，自治体，園，教員の異なる文脈における幼稚園教育要領の理解の難しさや 10 の姿の評価が課題として提示された。また，研究者に対しては次世代に求められる資質・能力を見据えた次期改訂のエビデンスとなる基礎研究の蓄積が，教員に対しては状況の意識化を促進する保育の可視化の必要性が提言された。

③　平成 30 年度保育教諭養成課程研究会・研究大会（2019 年　1 月 14 日，国立オリンピック記念青少年総合センター）

大会企画シンポジウムでは，桶田ゆかり氏（東京都文京区立第一幼稚園），加藤篤彦氏（東京都武蔵野東第一・第二幼稚園），寳來生志子氏（横浜市立池上小学校），嶋田弘之氏（草加市教育委員会）による「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿と小学校教育との接続」と題した提案が行われた。桶田氏からは，東京都の幼小連携・交流の現状が報告された。加藤氏からは，園内研修の取組が紹介された。両氏は共通して，小学校や保護者に「自分の保育を語ることができる教員を育てる」ことの大切さを指摘した。寳來氏は，スタートカリキュラムの事例を紹介した。嶋田氏は，幼保小中一貫教育の事例を紹介した。大会全体を通して，保育士および幼稚園教員養成と小学校教員養成の接続が言及された。

（池田吏志*・渡邉　巧*・長山　弘*）

Ⅴ　本研究の成果と今後の課題

本研究では，幼児教育の関連学会での動向調査（研究３），幼稚園教育実習における受講生の学びに関する調査（研究２），そして『幼稚園教育要領解説』の記述内容の分析による幼稚園教員に求められる資質・能力の整理（研究１）を通して，養成段階における横断的・総合的な幼稚園教育教員養成プログラム構想の基盤的研究を行った。その結果，領域科目の内容編成では，遊びを中心とした幼稚園の特性を踏まえ，領域の固有性の保持と

共に各領域が常に連動・連携する必要性が示唆された。また，本研究を実施している同一年度，平成 30 年 6 月 15 日には「経済財政運営と改革の基本方針 2018」が閣議決定され，平成 31 年 10 月からの全面的な幼児教育の無償化や私立幼稚園教諭等の免許状上進促進のための幼稚園教諭免許法認定講習等の促進など，幼児教育の質向上に向けた取り組みが行われることとなった[1)]。このことを踏まえた今後の課題として，本研究で提示した内容は養成段階においてのみ留意されるものではなく，現職教員研修や免許法認定講習等も視野に入れた，キャリア・ステージに応じた科目内容の構想が求められている点にも留意する必要がある。

（木村博一*・山内規嗣*）

付記

本研究では，別冊『－平成 30 年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト－横断的・総合的な幼稚園教育教員養成プログラムの構築研究論文集』を作成し，紙幅の都合で本報告書に掲載できなかった調査・研究の成果を掲載した。

注

1）平成 30 年度保育教諭養成課程研究会・研究大会（2019 年 1 月 14 日）において，文部科学省初等中等教育局幼児教育課長先崎卓歩氏による講演「幼児教育の現状と今後の動向について」が行われた。本文に記述した内容は，配布されたハンズアウト資料からの引用である。

参考・引用文献

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』，フレーベル館

文部科学省・厚生労働省・内閣府（2017）『平成 29 年告示幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領』，チャイルド本社